

何げない一言から

山本百合子さん
広見新町(53歳)



近所づきあいの第一歩は、隣の家の庭を見て「きれいな花ですね」と何げない一言をかける事から始まるのではないのでしょうか。

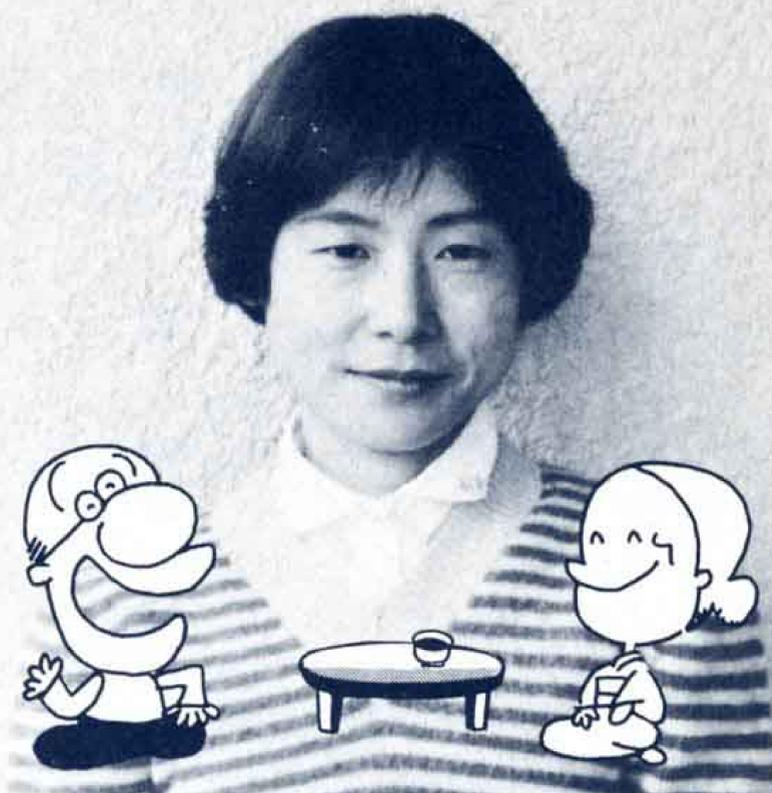
この簡単な一言が世間話、そしてちょっとした相談事に発展し、結びつきを強くすると思います。

また、地域の公民館で開催するいろいろな趣味のサークルに参加することも一つの方法です。

私は公民館で開催しているある教室に参加していますが、はなしをしているうちに「あら、お宅はうちの近所じゃない」なんてことがありました。

近所の奥さんと趣味が同じだったとわかると、よけいに親密感がわきます。

昔と違って近所づきあいが薄らいでいると言われていた今の世の中で、近所の子どもをいたずらなど、堂々としかってやれる社会になってほしいものです。



「お年寄りには知恵袋」と佐野さん

世代を越えたつきあいを

佐野千賀子さん
中里(33歳)

今は、中里に住んでいますが、原田に住んでいた時のことです。

同年齢の子どもを持つご近所の遠藤さん一家と知りあい大変お世話になりました。ある時、仕事が忙しく子どもを幼稚園へむかへに行く時間を忘れ、あわてて行ってみると、遠藤さんが一緒に連れ帰って家で遊ばせていただいた事もありました。遠

藤さん一家のおかげで近所づきあいの大切さを知った私は、天気の良い日は外へ出て近所の方と話をするように心がけました。

特にお年寄りとの話は、お年寄りの経験とか、いろいろな知恵袋に接することができました。さつぱつとした世の中で、世代を問わずつきあいがあれば昔話、風習、慣習などを知り得、人情も生まれて来るのではないのでしょうか。現在の場所へ移り住みまだ一ヵ月、本当のおつきあいはこれからだと思っています。

私の声は鼻にぬけて聞きにくく、しゃべりかたもかたいです。自分で聞いてみるとよくわかりますね…。と話す口調は、言葉とは逆に歯切れがよくおだやかな感じを受けました。ボランティアグループ「山びこ」に所属、目の不自由な人に声のたよりを送り始めて七年になるといふ熊谷さんを自宅にたずねました。



ボランティアとして、目の不自由な人に声のたよりをとどけている。

くまがいよしこ
熊谷良子さん

若松町(34歳)

外出身者も多くそれぞれ多少のなまりがあります。でも、少しのなまりは、変化があつて聞く人も楽しいのではと思つています。広報ふじを吹き込んでいるので市政もちよつと明るくなりました。これまでやってこれたのはグループの皆さんと主人の理解があつたからです。とご主人おもいの熊谷さん。二人の子どもは母親でもあります。

目の不自由な人は、耳がたよりのなので、聞きとり易いように、また、人の名前や地名は念には念を入れ、確認してから録音します。アフセンにも気をつけますが、私達のグループは、